



珠姫 解説資料

kanazaWAZA研究所 文章：安藤竜

プロローグ

天下分け目の関ヶ原を目前にし、徳川家康は最大の障壁である前田家を取り込むべく、前田利家の正室、芳春院を江戸に人質にとった。見返りとして金沢に嫁ぐことになったのが家康の孫娘である珠姫、ときに3才。

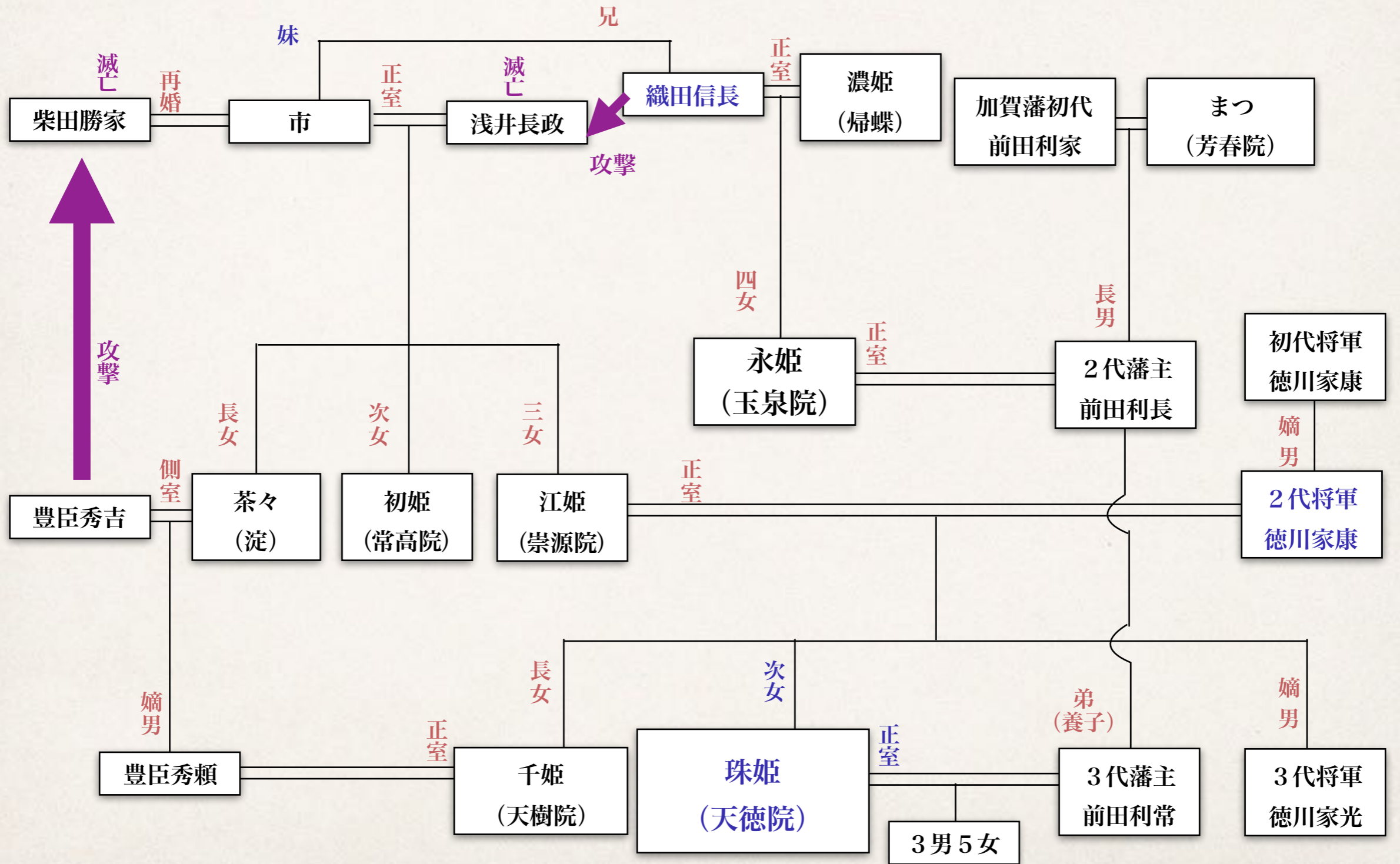
無邪気に遊んでいた珠姫は絶望感に襲われる。

しかしある時、珠姫は自身に流れる織田家の血に気づく。織田家の女性に流れるのは人を愛する力。

もう私は怖くない金沢にやってきた。
やっぱり私は幸せになるみたいだ。



珠姫相関図



珠姫関連年表

| 年号 | 西暦 | 月日 | 年齢 | 出来事 |
|------|------|-------|----|---|
| 慶長4 | 1599 | 閏3/3 | 1 | 前田利家死去。 |
| 慶長4 | 1599 | 6/11 | 1 | 珠姫誕生。幼名は子々姫。新暦では8/1。3月生まれの説もあり。 |
| 慶長4 | 1599 | 冬 | 1 | 利長が謀反の疑い。3回におよぶ交渉は翌年春まで。まつ（芳春院）の江戸下向が決まる。 |
| 慶長5 | 1600 | 6/6 | 2 | まつ（芳春院）が人質として江戸へ到着。5月17日に伏見を出発。 |
| 慶長5 | 1600 | 9/15 | 2 | 関ヶ原の戦い。 |
| 慶長5 | 1600 | 11/10 | 2 | 徳川家康の孫、珠姫と前田利長の弟（養子）の利常との婚約が決まる。 |
| 慶長5 | 1600 | | 2 | 博労町の榎田吉蔵が、生菓子の用命を受ける。のちの五色生菓子。 |
| 慶長6 | 1601 | 9/1 | 3 | 7月1日に珠姫が江戸を出発。9月1日に金沢へ入る(慶長10年との史料もある)。 |
| 慶長7 | 1602 | 8/初 | 4 | 利長は珠姫に踊りを見せるため、城中に練習させ、自分も鼓を打つ。 |
| 慶長10 | 1605 | 6/28 | 7 | 前田利常が加賀藩主となる。 |
| 慶長18 | 1613 | 3/9 | 15 | 長女・亀鶴姫誕生。金沢千手院・埴生八幡宮・熱田神宮などで安産祈願を行う。 |
| 慶長18 | 1613 | 4/13 | 15 | 珠姫は、山王社が氏神のため、河北郡北中条村山王社の社殿を寄進。 |
| 慶長19 | 1614 | 6/? | 16 | 利長死去のため、芳春院の代わりに寿福院（利常の実母）が江戸へ人質となる。 |
| 慶長19 | 1614 | 11/24 | 16 | 大坂の陣にあたり、珠姫は家康・秀忠・利常の祈禱を埴生八幡宮に依頼。 |
| 元和元 | 1615 | 11/20 | 17 | 長男・光高（加賀藩4代藩主）誕生。 |
| 元和2 | 1616 | 不明 | 18 | 次女・小媛姫誕生 |
| 元和3 | 1617 | 4/29 | 19 | 次男・利次（初代富山藩主）誕生。23日には埴生八幡宮で安産祈願。 |
| 元和4 | 1618 | 不明 | 20 | 三男・利治（初代大聖寺藩主）誕生。 |
| 元和5 | 1619 | 12/15 | 21 | 三女・満姫誕生。 |
| 元和7 | 1621 | 1/2 | 23 | 四女・富姫（ふうひめ）（八条宮智忠親王妃）誕生 |
| 元和8 | 1622 | 3/3 | 24 | 五女・夏姫誕生。 |
| 元和8 | 1622 | 7/3 | 24 | 夏姫誕生後、体調を崩して死去。 |
| 元和8 | 1622 | 8/8 | 24 | 小立野にて葬儀。 |
| 元和8 | 1622 | 9/23 | 24 | 珠姫の菩提寺として、高野山に天徳院が建立される。 |
| 元和9 | 1623 | 8/下 | | 珠姫の侍女が自刃。 |
| 元和9 | 1623 | | | 小立野に天徳院が建立される。 |

発端

発端は慶長4（1599）年の春

豊臣秀吉から子の豊臣秀頼の後見役を頼まれていた前田利家が死去
徳川家康は天下取りの野望を明らかにし その年の冬には前田家謀反の噂が流れる

これを「慶長の危機」と呼ぶ

まずは利家の正室であり利長の母である
まつ（芳春院）が人質として江戸に行くことが決定

関ヶ原の戦いで
前田家は豊臣方の西軍ではなく徳川方の東軍につき勝利

約120万石を与られる

珠姫の結婚

前田利長には子がなく 弟の利政を養子にする予定だった

しかし 利政は関ヶ原の戦いで出陣を拒否 改易となる

そのため 利家の側室の子だった利常が利長の跡を継ぐことになる
幼名も猿千代から 嫡男が名乗る犬千代に改名

関ヶ原の戦いで最大の大名となった前田家を
依然脅威と考える家康は
利常と孫の珠姫（当時：子々姫）の婚約を決めた

まつは自分の血が流れる利政の子、直之を利常の後継にすることを常に考えていたが
利常と珠姫の間に光高が生まれたことで騒動はなくなった



珠姫の輿入れの様子「江戸から金沢へ」

慶長6年（1601）7月1日

江戸を出発9月1日に金沢へ入る

江戸から金沢までは道路の掃除をし橋を新しくかけ舟橋をかけ
一里（4km）ごとに茶屋を建てさせ各地の大名は御馳走のために担当奉行をつけた

馬も人も大量で旅行というより自宅にいるかのようにだった

移動の途中 酔屋の権七という狂言師が銀の立烏帽子に朱色の丸をつけ
素襖袴（すおうばかま）で頭を振り 珠姫が入っているお輿の前に立って踊り
その間には 小謡（こうたい）の上手な者に歌わせ 様々な芸を行い金沢へ入った

お供の輿は100余り

江戸から金沢まで山海の珍味や百味の飲食を用意され
祝いの品が入り乱れて昼夜なく騒ぎながら金沢へ入った



おまつの心情と利長

おまつにとって

血の繋がりが無い利常が藩主となることも
その正室が徳川家からきた珠姫であることも認めがたいことだった

しかし 長男の利長のため
次男利政の息子の直之のため 耐え忍ぶ

そんな母をありがたく思いつつも
利長は妻の永姫とともに利常と珠姫の親として守ることを決意する

それは

利長が鼓を打って珠姫を楽しませる宴を行ったり
後におまつが金沢に帰った際
珠姫と永姫が同じ本丸に住んでいたことからわかる



珠姫の心情と時代背景

関ヶ原の戦いが終わっても まだ豊臣家は大坂城にいた
家康の開いた江戸幕府が安定し 戦いのない世界を実現するには
前田家と徳川家がひとつになる必要があった

しかし珠姫の夫・利常は
側室の子のため藩主としての力が弱かった

そのため珠姫は夫を愛するだけでなく
夫の立場を高める存在でなくてはならなかった
前田家にとって おまつを超える存在にならなくてはならなかった

普通ならプレッシャーに押し潰れそうになるところ
珠姫は乗り越えられた

それはもしかしたら彼女に流れる織田家の血ゆえだったのではないだろうか



珠姫の「想いの強さ」の例

珠姫は24歳で亡くなるが利常とは8人の子供が生まれており
夫婦仲は非常に良かったと伝えられている

利常が江戸にいると
金沢にいる珠姫から將軍秀忠に飛脚が頻繁に送られて
「早々に金沢に戻らせるように」とお願いされたため
2・3ヶ月も立たないうちにすぐに金沢へ戻るがあったという

それもあって
利常は珠姫と息子たちのために
数カ所の芝居を浅野川と犀川の2か所に立ち並べ
人形浄瑠璃・歌舞伎などを見物させた

城にも呼んで褒美の品を大量に渡したので
京都・大坂の様々な芸人がたくさん金沢にやってきたという

織田家の血とは

珠姫は2代将軍徳川秀忠と江の次女 江の母は 織田信長の妹・お市

珠姫には織田家の血が流れている。

織田家の女性はとくに壮絶な人生を送った人が多い

信長の妹の市は 夫を兄に殺され

お市の長女の茶々は 母を殺した相手と結婚して子をなすが その子とともに戦って自害

織田家の女性は懸命に夫を愛し共に死ぬことすら厭わなかった

それが 元々は望まぬ結婚だったとしても

ある種 狂氣的なまでの「想いの強さ」が織田家の血なのではないか



珠姫の想い

前田家は親豊臣の筆頭

珠姫は3歳にして敵方へ嫁ぐことになった

しかし敵に嫁ぎ 敵を夫として懸命に愛してきた織田家の女性の血に気づく

なら私だって大丈夫に決まっている。

織田家の女性は皆、それができたのだから。

金沢では おまつを筆頭に

側室の子である利常と徳川の娘である珠姫を受け入れない雰囲気は確かに存在した

しかし 夫の利常・利長・織田家の血をひく永姫をはじめ
多くの家臣・民衆が珠姫を受け入れ そして守ってくれた

ほら やっぱり私は幸せになるみたいだ



珠姫の最期

元和8年（1622）3月

利常との8人めの子供である夏姫のお産の後 病気がなかなか治らなかった

珠姫が病気の間 江戸と金沢では昼夜を問わず人馬が止まらないことはなかった

神社の病気快癒祈願は八大龍王も驚かすほどだった

しかし、治療の甲斐なく、元和8年7月1日に死去。

24歳のことだった。

